

サラの恋

「何か勘違いしてるんじゃないかね」

治療師はそう言っただ断った。

祭りの時にサラが媚薬を買えなくてふくれていたので、リタはサラのために治療師に頼んだのだ。

「いいかい、媚薬っていうのはだいたい中年の夫婦が使うものなんだよ。なんでサラみたいに若い娘が必要とするんだい。おかしいじゃないか」
「きつと、サラはただ持っていただけなのよ。媚薬という名前に憧れているのよ」

「それなら、小瓶に水でも入れてやればいいじゃないか。そういえば、小瓶ももうなかったね。だいたい一つだけ作るなんて面倒じゃないか」

「そうね、わかったわ」

小瓶もなかったことに気付いてリタはあきらめた。

それから何日かリタは再び薬事全科の書き写しをして過ごした。ある雨の日、リタは窓辺で書き写しをしていたが、細かい霧雨が風で流されて家の中に入ってきて、薬事全科や書き写し

を濡らさないように、部屋の中央にテーブルを戻して、薄暗い中で一人で書き写しをしていた。前日から治療師は近くの村に呼ばれて出かけていて、リタは書き写しの他にすることがなかった。直接雨がかからなくても、紙が湿気を吸ってインクが滲みやすくなっていった。書き写しは晴れた日にしようかとも思うが、また治療師が帰ってきた時に何もやっていなかったと言われなくなかった。

ドアにノックの音がした。

急病人だったら、村長に頼んで馬で治療師を迎えに行ってもらわなければならぬ。雨が降っているから、使いの人も治療師もずぶぬれになってしまうだろう。

そんなことを考えながら、リタがドアを開けるとサラが立っていた。レインコートを着ているけれど、前髪から滴がたれている。

「まあ、どうしたの？　こんな雨の日に。家で急病人でも出たの？　治療師は出かけているのだけれど」

「知ってるわ。だから来たの」

急病人ではなさそうなので、リタはとりあえず安心した。サラを家の中に入れて、タオルを渡

し、コートを手ハンガーにかけた。

「媚薬が欲しいの」

「でも治療師は出かけているって言ったでしょ。それに小瓶もないのよ」

「瓶なら持ってきたわ」

サラは香水の瓶を取り出した。

「お祭りの時にお父さんが買ってくれたの。でも、今は媚薬の方が必要なの」

そう言うとサラは窓から手を出して香水の瓶の中身を外に捨ててしまった。香水の強い香りが立ち上がる。

「どうしたのよ、サラ。もったいないでしょ」

「いいのよ。これで媚薬が入れられるでしょ。媚薬をちょうだい」

サラの態度に圧倒されてしまいそうになったが、なんとかリタはサラを椅子に座らせてお茶を飲ませた。

「媚薬が必要なの」

「誰か飲ませる相手がいるの?」

「そうなの。祭りの夜に会った人なの。街に住んでる人なのよ。すらつと背が高く、鼻筋が通っていて、瞳はやさしい灰色なの。髪は栗色でちよつとウェーブがかかっているのよ。とてもダ

ンスが上手なの」

「その人を好きになったのね」

「そうなのよ。恋に落ちるって言うけど本当ね。すーっとどこかに落ちていきそうな気持ちなのよ。わかるかしら。落ちていきそうでも空に昇っていくような気もするわ」

「ともかく、足が地面に着いていないわけね」

「そうね、そのとおりだね。ふわふわ浮かんでいるような感じもするわね」

「でも、媚薬は物語り出てくるような惚れ薬じゃないのよ」

サラはリタの言葉に驚いたようだ。

「どういうこと？ 媚薬が惚れ薬じゃなくて何なのよ」

そこでリタは治療師が言っていたことをサラに説明した。媚薬は中年の男のものがうまく役に立たない時に、それをなんとかする薬だということ。

「それより、一緒にダンスを踊ったのなら、その人もサラに気があるんじゃないの？」

「あたしも最初はそう思ったのよ。ダンスが上手だとか、服が似合っているとかが言ってくれるから、あたしもその気になっちゃったのよね。で

も違うの。そうじゃなかったのよ」

「どう違うっていつの？」

「だって手も握ってくれないのよ。話している時は愛想がいいのに腕を組もうともしないし。あたしから腕を組むと脅えたような顔をするのよ」

「礼儀正しいだけじゃないかしら」

「そんなことないわ。あたしが組んだ腕をいつの間にか振りほどいているのよ。そんな礼儀はないわよ」

「でも嫌われているなら諦めた方がいいわよ」

「そこがわからないのよね。嫌われているとは思えないんだけど……」

「あたしもいま話を聞いただけではサラが嫌われているとは思えないわ。その人、何か隠していることがあるんじゃないの」

「そうね、そんな感じなの」

「実はもう結婚しているとか……」

「そんなことないと思うわ。結婚している人はむしろもつと積極的なものよ。どちらかというど童貞だと思っわ」

「じゃあそのせいで自信がないんじゃないかしら」

「でもそれだけじゃないと思うの」

「とにかく媚薬は諦めてちょうっだい。惚れ薬じゃ

ないのよ」

「媚薬……。そうだ、きつとそうよ」

「どうしたのよ？」

「あの人の隠しごとよ。きつと若いのにあそこが思うようにならないんだわ」

「そうかしら、だって中年の男だけがそうなるんでしょ」

「若いのに白髪が生えたり、髪が薄くなったりする人もいるのよ。若くて立たない男がいても不思議はないわ。きつとそうよ。そう考えれば、あの人の自信のなさそんな態度の説明がつくもの」

「そうとは限らないでしょ」

「きつとそうよ。それにもともと媚薬はあたしが買うはずだったのよ。母さんじゃなくて。だから、あたしに媚薬を作ってちょうだい」

「治療師に無断で作れないわよ」

「大丈夫よ、あたしは誰にも言わないし、瓶だつて持ってきたんだから、わかりっこないでしょ」

「そういう問題じゃなくて……」

「もう、あたしの頼みがきけないっていうの。リタ、あなたのことは親友だと思っていたのに……ひどいわ」

「もちろんサラはあたしの親友よ。でも、これ

はそれとは別の問題なのよ」

「どこが別なのよ！」

「どっちにしてもすぐには作れないのよ。瓶も洗って水を切らなきゃならないし……」

「わかったわ。瓶は置いていくわ。明日取りに来るからそれまでに作っておいて」

「だめよ。治療師の許可もなく作れないのよ」

「親友と治療師とどっちが大切なのよ」

「両方とも大切なの。わかってよ、サラ」

「わからないわ」

サラはそう言うと、立ち上がってコートをつかみ雨の中に出て行ってしまった。

困ったことになったと思いつながら、リタはサラの置いていった香水の瓶を見つめた。瓶は青いガラス製で、そこから強い香水の匂いが流れ出ている。

リタは香水の瓶を洗った。サラのために媚薬をつくるつもりはなかったけれど、香水はもう空なのだから、瓶を洗っておいた方がいいと思ったのだ。

媚薬を作るための材料がないと言って断ろうかと思いついて、リタは薬草庫に入った。ネルガの根は前回使った残りが少ししなびていたがそのまま棚

に置いてあった。カナピラを浸けこんだ蒸留酒はまだ半分以上残っていた。小瓶十本分というのは本当に少しの量なのだ。材料は十分あった。夜までには治療師も帰ってくるかも知れない。そうすれば、サラのためにこっそり媚薬を作ることは出来ないだろう。それならサラも諦めてくれるに違いない。

リタは書き写しを再開したが、湿気でインクが滲んでしまう。それで治療師が帰って来ないかと窓の外を眺めていたが、霧雨はいつか勢いを増してしとしとと雨が降り続けているばかりである。

雨の中を無理して帰ってくるより、行った先で酒でも飲んでいる方が治療師らしい。もっとも病人が死んでしまったら、治療師もゆっくりしていないですぐに帰ってくるだろう。そう思ってから、リタはその想像を打ち消した。治療師見習いがそんなことを望んではいけない。

リタは窓を閉めて、竈に火を熾した。豚飼いからもらった塩漬け肉をシチューにしよう。ふだんは時間がなくてゆっくり煮込む料理はしていなかった。シチューを作っておいて、治療師が帰ってきてから温めて食べよう。そして、肉を

煮込んでいる間に竈の火を明りにして書き写しをしようと思った。火が燃えていれば湿気も収まるだろう。

鍋が煮え立つてくると湯気が吹き出してきたが、火を小さくしてゆっくり煮込むようになると、安心して書き写しをすることができた。

竈の火は小さくて書き写しをするには少し暗かったが、リタは書かれている薬草の種類や、病気の見分け方などを心に刻みながらゆっくり書き写しを進めた。

そういえば、治療師はサラに渡す媚薬は水を入れてやれば良いと言っていた。それなら治療師に無断で薬を作ったことにもならないし、サラも媚薬をもらって満足するだろう。

リタはサラの持つてきた香水の瓶に水を詰めようかと思い、洗った瓶を手にとってみた。匂いを嗅いでみると、まだ香水の臭いがしたので、もう一度水で洗った。

それから水を少しだけ入れてみた。瓶に色が着いているので中身は見えない。その瓶をサラに渡すつもりで置いておいて、書き写しに戻ったのだが、サラを騙すことになると思うと気が重かった。

しばらく書き写しをしているうちに、治療師は媚薬を作るのが面倒だと言ったのだから、治療師の代わりにリタが作るのはよいのではないかという気がしてきた。

媚薬は薬であって薬でないと治療師は言っていたような気がする。もともと病気を治す薬ではないのだ。祭りの時の媚薬作りだって治療師は指示しただけで、実際に作ったのはリタなのだ。治療師の指示はすっかり覚えていいるから、そのとおりに作るなら前と同じものが出来るはずである。

リタがそんな風に考えたのはサラに嫌われたくなかったからだろう。サラはリタより一ヶ月上だっただけで、二人はとても仲がよかった。リタが怪我をした時もサラはすぐに見舞いに来てくれた。それに、サラがリタの顔のことを気にしなかったので、リタも自分の顔に傷があることを忘れてしまっくらいだった。

媚薬を作っておいて、サラに渡すかどうかは明日決めればいいとリタは思った。明日には治療師も帰ってくるかも知れない。サラも明日来るとは限らない。リタはそんな言い訳をしながら、媚薬を作った香水の瓶に入れた。

シチューもすっかり出来上がったので、リタは竈の火を消して家に帰った。

翌日も雨が降っていた。

リタは家から持ってきた蠟燭の明りで書き写しを進めた。リタは雨が嫌いではなかったけれど、今日の雨は気が滅入った。

今日は治療師が帰ってくるかもしれない。サラが媚薬を取りに来るかも知れない。二人とも来ないかも知れないし、二人とも来るかも知れない。治療師はサラに媚薬を売るかも知れないし、売断るかも知れない。

サラの相手の名前を聞かなかったことにリタは気付いた。

昼前にサラが来た。リタは台所の薬事全科と書き写しを薬草庫に仕舞ってからサラを出迎えた。

「ねえ、リタ。媚薬作ってくれた？」

サラはレインコートも脱がずに媚薬を受け取るうとした。

「その前に、サラのお相手のことをもっと詳しく教えてよ」

「いいわよ」

サラがレインコートを脱いで椅子に座ったの

で、リタはお茶を入れた。

「名前も聞いていなかったわ。なんていう名前なの？」

「ヨハンっていうのよ。生まれた時は別の名前だったのだけれど、偉い人に勧められて変えたんだって」

「名前って途中で変えてもいいの？ 知らなかったわ」

「あたしも知らなかったの。でも自分で勝手に変えてはいけならしいわ。偉い人が決めるんだって」

「それでヨハンとは祭りの晩に会ったのね」

「そうよ、ヨハンったら踊りに来たのに、女の子に声を掛けられなくてうろろろしていたのよ。だからあたしが踊りに誘ったのよ。本当に気の小さな人なのよ」

「それでまた会う約束をしているのね。街から出てくるの？」

「違うのよ」

そこでサラは声を低くしてから続けた。

「森にいるの。ほら古い小屋があったでしょ」

そう言えば、西の森の中に古い小屋があった。

屋根にも穴があいていて、戸も壊れている小屋

で誰も住んでいない。

「あんなところにいるの。だって雨が漏るでしょ」

「屋根はヨハンが直したのよ。あの人結構器用なの」

「じゃあ、ヨハンはこの村に住むつもりなの？」

「わからないわ」

「だって住むんならちゃんと村長の許可を取らないといけないのよ」

「わかってるわよ。ヨハンさえその気になってくれたら、ちゃんとお父さんの許可をもらおうよ。だから媚薬が必要なのよ。ねえ、リタ。作ってくれたんでしょ」

「作ったことは作ったわよ。でも治療師に無断では渡せないわ」

「じゃあ、治療師が帰って来てから言えばいいじゃないの」

「そういうわけにはいかないわ」

「だって治療師がいないんじゃないでしょ。どうせよその村でお酒でも飲んでるんだわ」

「雨が降っているんだから簡単には帰れないわよ」

「じゃあ、治療師のところまで行って聞いて来よう」

「だめよ、だって留守番してなきゃいけないも

の。急病人が出るかも知れないし……」

「留守番してることとは、その間のことはリタに任されているってことですよ。だったらあとで媚薬を売ったって平気よ」

確かに軽い怪我人が出たらリタが傷薬を塗ってやってくれと治療師は言っていた。媚薬を売るのはは軽い怪我と同じようなものだろうか。

リタは迷ってしまった。

「大丈夫よ、治療師が帰ってきたらすぐにそう言えばいいだけよ」

なんとなくサラに押し切られて、リタは媚薬の入った瓶を渡した。

「ありがとう。お代はいくらかしら？」

「治療師に聞いてみないとわからないわ。あとでもらうわ」

「ありがとう。うまくいったらヨハンを紹介できると思うわ」

サラはそう言っって媚薬の入った瓶を持って帰った。

その日は雨が降り続け、治療師は帰って来なかった。

夜の間にも雨が上がり、翌日は朝からよく晴れ

ていた。

治療師も帰ってくるだろうと思つと、リタの心も軽くなった。リタは窓を開けて風を通し、洗濯物を持って洗濯場に行った。洗濯をしているとサラが走って来た。

「大変なの。ヨハンの様子がおかしいのよ」

それを聞くとリタは怖くなって来た。媚薬が原因かも知れない。

「どうおかしいの？ 話は出来るの？」

「話は出来るわ。でも苦しそうな。男の人つてやせ我慢するからどのくらい苦しいのかわからないのよ」

「雨が上がったから、昼には治療師が戻ってくると思ふけれど。それより早く呼びたかったら、村長に馬を借りて誰かに呼びに行ってもらわないといけないわね」

「お昼までは待てると思つわ」

「じゃあサラはヨハンについていてあげて。具合が急に悪くなったら呼びに来てちょうだい。治療師が戻ったらすぐに行くわ」

「わかったわ」

そう言つてサラは帰った。リタは洗濯を続けたが、ヨハンの病気が気になつて仕方がなかった。

やはり媚薬のせいだろうか。サラがヨハンに媚薬を飲ませたのは間違いないだろう。

それは昨夜のことだろうか。そうすると今朝ヨハンの様子がおかしいとしたら、やはり原因は媚薬のように思える。作り方を間違えたのかも知れない。それとも香水の瓶の洗い方が不十分で中身が残っていたのだろうか。

どこで間違ったのか、媚薬作りの手順を思い出してみたが、間違えたところがわからない。一方、媚薬が原因だということはますます確かなように思えてくる。

やはり治療師に相談してから媚薬を作ればよかった。見習いなのに勝手な行動をしたのがいけないかったのだ。リタの心はそんな後悔の気持ちでいっぱいになった。

洗濯物を薬草の汁につけ、干している時も、そのあと書き写しをしている時も、リタの気持ちは晴れなかった。お母さんにも薬草の話は話していないのに、友だちの頼みくらいで薬を作ってしまった。後悔することは尽きない。

だんだん落ち着いていられなくなって、治療師を途中まで迎えに行こうかと思ったが、サラが来るかも知れないと思うと家を空けられなかった。

昼近くなつてようやく治療師が到着した。

「ごめんなさい」

リタは治療師の顔を見るとすぐに謝った。

「ああ、なんだい?」

なぜ謝っているのかわからない治療師に、リタは事情を説明した。そしてヨハンの様子を見に行つて欲しいと頼んだ。

「その前に、何か食べさせておくれよ。お腹が空いたからね」

リタはすぐに温めておいたシチューとパンを出した。

「ああ、なかなかうまいじゃないか」

リタは料理を誉められても少しも嬉しく思えなかつた。

「じゃあ行こうかね」

治療師は手早く食事を終わると立ち上がった。リタは治療師の鞆を持ってあとをついて歩いた。西の森のあばら屋の中でヨハンは藁を敷いた上に横たわっていた。そばにサラが藁束の上に腰かけていた。

「媚薬を飲ませたそうだが、どれだけ飲ませたんだい?」

治療師は小声でサラに聞いた。

「どれだけって、もらっただけよ」

「一瓶全部のませたのかい？ リタ、一瓶にどれだけ入れたんだい？」

「お祭りの時と同じだけよ」

「はあ、こりゃあ大変なことになってるかも知れないね。よし、ちよつと見せてもらおうかね」

治療師がヨハンのズボンを脱がせようとすると、ヨハンは激しく抵抗した。

「駄目です。やめて下さい。ご婦人には見せられません。大丈夫です、なんともないんです。いやー、助けて神様」

「どうしたのよ、ヨハン。治療師なんだから恥ずかしがることないのよ。見せなきゃ治してもらえないわよ」

「だめえ、やめてえ、見ないで」

ヨハンの抵抗をもつともしないで、治療師はズボンと下着をずらしてヨハンのものを見た。

「いや、凄いことになってるね。ここまで大きくなるもんだとはあたしも知らなかったね。これは痛いんじゃないかね。痛いかい。やっぱり痛いんだね。おい、リタ。ちよつとこっちに来て見てごらんよ」

治療師に呼ばれたのでリタが近づくと、ヨハン

は悲鳴を上げながら小屋の隅に逃げ込んで向こうを向いて背中を丸めて座り込んでしまった。

「まあいいか」

治療師はそう言うてからサラとリタを呼んで小屋を出た。小屋の外で二人に話しかけた。

「媚薬の効き過ぎだね。リタ、ちゃんと一回の使用量を教えなきゃだめじゃないか」

「あたし、知らなかったの」

「なんだって。……そうか、そのことは後にしよう。サラ、こんな若い男には媚薬なんていないんだよ。まあ、今より悪くなることはないが、お茶をたくさん飲ませてたくさんおしっこをさせればそのうち元に戻るだろうさ。ぬるいお茶を飲ませてやるがいい。おしっこをするのはちよつと大変かも知れないが、なんとか工夫するんだね」

サラは少しほつとした様子で治療師の言うことを聞いていた。

「あの男は街の修道院を脱走して来たんじゃないかい？」

治療師の問いにサラはわからないと答えた。

「たぶんそうだろうよ。リタ、マルカをここに呼んで来ておくれ。何があったかをすっかり伝

えておいておくれよ」

リタはマルカ母さん呼びに帰った。その帰り道ですっと考えていたのは、見習いをやめさせられるだろうということだった。母さん呼びぶのはそのためとしか考えられない。

ヨハンが苦しんでいるのはリタのせいなのだ。媚薬を勝手に作ったのも悪かったが、一回の使用量をサラに教えなかったのも悪かった。それで病人を作ってしまったのだから、見習いをやめさせられても仕方がない。

でもリタは既に治療の技の秘密に触れてしまっていたから、秘密を守るといふ誓いを立てなければならぬだろう。一生秘密を心に隠して生きなければならぬのだ。

「お母さん、あたし治療師の見習いを辞めさせられるかも知れないの」

家に着くなりそう言ったリタの言葉にも動じないで、マルカはリタを椅子に座らせてお茶を飲ませた。それからリタは何が起ったかをマルカに話した。治療の技の秘密に触れないように気を付けながら。

マルカはリタの話の話を聞くと、出かける準備をした。

「あのあばら屋には竈があったかしら。それから何人いるの?」

マルカはそんなことをリタに聞いて、お茶会でもするよつに薬缶や茶碗やお砂糖などを籠に入れて、なんだか楽しそうにしている。リタはマルカのあとをついて、水の入った薬缶とクツキーの袋を持ってあばら屋に戻った。

「あら、治療師はどうしたの?」

あばら屋には治療師がいなかったので、リタはサラに尋ねた。

「あとはマルカ小母さんに任せるって言って帰ってしまっただわ」

「はい、じゃあ任せてもらうわよ。リタ、竈に火を熾してちょうだい。まず、みんなでお茶を飲むことにするわよ」

竈はあったものの長いこと使っていないかったよつで湿気ていたが、サラが持ってきたらしい藁がたくさんあったので、なんとか火打ち石で火を熾して、燃え残っていた薪に火を付けることができた。

「まあ、まあ。そんな陰気な顔をしないで。もっと楽しい顔をしなきゃね。楽しいお茶会の始まりなのよ」

「お茶会？」

サラが驚いたような声を出した。

「そうよ。治療師はお茶を飲むように言ったのよね。お茶を飲むならみんなまで飲むほうがいいわよ。だから、お茶会なのよ」

あばら屋にはテーブルも椅子もなかったから、藁の束を椅子の代わりにした。そして家の外にあつた薪を組んで台にしてその上に、外れて落ちていた窓を乗せてテーブルの代わりにした。

その間にお湯が沸いたのでポットにお茶の葉をいれてお湯を注いだ。持ってきたクッキーをお皿に盛ってテーブルの真ん中に置き、茶碗をそれぞれの人の前に並べてお茶会の準備は整った。マルカはお茶を注いで周り、それからこう言つた。

「さあ、ヨハン。あなたがどうしてここにいることになったのか、その理由をすっかり話してちょうだい」

ヨハンは初めはためらっていたが、マルカの微笑みを見ると、だんだんくつろいできて、ゆっくりと話しはじめた。

みんな僕がいけないんです。淫らな心を起した

のがいけないんです。僕は街の修道院に住んでいました。十の歳に坊さんになるようにと親が入れたのです。

初めは神様に仕えることは素晴らしいことだと思っていました。しかし、だんだんつまらなくなってきたしまったのです。そしてこの数年はずっと淫らな心を抑えるのが難しくなってきました。

僕は修道院では一番年下です。それで僕より年上の修道士に恥ずかしいけれど淫欲が我慢出来ないと相談しました。そうしたらみんな交代で夜中に修道院を抜けだして街で女と遊んでいるというのです。

僕はそんなこと少しも知りませんでした。でも僕には遊ぶお金がありませんでした。年上の修道士たちは親からの仕送りやなんかでお金を持っていたのです。でも僕の親は仕送りをしてくれません。それでお金がありませんから、遊べませんでした。

でも年上の修道士たちの話を聞くと一層淫欲が高まってしまいました。そうしたら、年上の修道士たちはこう言うのです。近くの村の祭りに行けばただで女と遊べるって。

それで修道士たちが街で遊ぶ時に着ていく服を借りて、祭りの日に修道院を抜け出して来たのです。ちょうど街に使いに行く修道士がいたので役割を代ってもらい、素早くお使いを済ませるとそのまま走ってこの村まで来たのです。

朝までには帰らなければならぬので、誰でもいいから適当に相手を捕まえてさっさと遊んで帰ろうと思ったのですが、もう何年も女の人を近くで見たことがなかったので、うまくダンスに誘うことも出来ません。

それに淫欲に負けて女の人と遊んでしまうのはいけないような気がして来ました。なんだか修道士たちにそそのかされるように出かけてきてしまったのですが、本当は女の人と遊びたかったのではなくてうまく淫欲を抑える方法が知れたかったのです。

それでももう帰ろうかと思っていると、サラさんが声を掛けて来たのです。僕はもう女の人に声を掛けられただけでわけがわからなくなってしまう、でももちろん断ることは失礼に当ると思っただダンスを踊ったのです。

ところが踊っている時に手が触れたり肩を触ったりする度にもうなんというかとろけるような

気持ちになってしまっ、もうこの手をずーっと握っていたいような気になってしまったのです。

それはもうなんというか今までの淫欲とは違うのです。今までの淫欲はそれはもう本当に悪魔の誘惑というようにどろどろして切迫した気持ちだったのですが、サラさんのそばにいてサラさんの声を聞いているとなんだかこう宙に浮いているようなふわふわしてずーっとこのまま何もしないでいたいというような気持ちになるのです。

それで僕は淫欲というのは教えのとおり本当に良くないもので、良いのはこのふわふわした気持ちだということがよくわかりました。きつとこのふわふわした気持ちが愛というものだと思えます。

ところがダンスの後もサラさんが少し散歩したいというので、僕はもうサラさんの言うことを聞いて、サラさんと一緒に居られるならそれでいいと思ってずっと散歩したのですが、サラさんの腕に触れたり肩に触れたりすると、また以前のようなどろどろした淫欲が起ってくるのです。

それでもつづつしたらいいか分からなくなっ

来たのですが、サラさんがもう少し一緒にいたいというのでそのまましばらく一緒にいたのです。いえ、もちろん僕も一緒にいたかったのですが、僕はもうのぼせていて何かものを言うのもうまく言えなくて。

やがてぼくはもう帰らないと朝のお勤めに間に合わない気がついたのですが、どうしてもサラさんにお別れをいうことができませんでした。そうしたらサラさんがもう家に帰らなければならぬけれどあなたはどうするのというので、僕も街まで帰らなければならぬというので、夜中に街まで行くのは途中の道で盗賊に襲われるかも知れないから止めた方がいいというのです。そして森の外れにあばら屋があるからそこに泊まればいいそうしたら明日の朝また会えるというので、それ以来帰りそびれてずっとここにいます。

気がかりなのは修道士に借りたこの服ですが、返しに行つて見つかると思つた修道士のみんなも遊んでいたことがバレてしまつたのではないかとも思っています。

それでサラさんと一緒にいるととてもいい気持ちになるのですが、何かの拍子に体が触れた

りすると、その度にまたむくむくと淫欲が起つて来てそれであわてて避けたりしてサラさんの不審を買っていたようです。でも、サラさんに對してそんな淫らな気持ちを持つていることを知られたくなくてなんとか隠そうとしてきたんです。

それで昨晚サラさんと一緒にお茶を飲んでいたので、なぜかその時から淫欲が非常に強くなつて来て、サラさんに触れてもいないのにもう押し倒したいというような淫らな気持ちがいじめられない程に高まつて来て、下のほうもさつきみられてしまったような具合になってしまったのです。

それで下の方はもうずきんずきんと痛みますし、ちょっとでも動くとなんだか獣のようにサラさんに襲いかかってしまいそうで、それを抑えるためにも体を抱え込んでずつとうずくまっていたのです。

そうしたらサラさんが病気だと思って、大丈夫と訊くので朝になれば治るだろうと言っておいたのですが、今朝になつても治らないので、サラさんが治療師を呼びに行ったというわけなの

です。

「淫欲ってなに？」

リタは疑問を口にしたのだが、その質問は無視された。

「それでヨハン、あなたは修道院に戻るつもりはあるの？」

マルカがやさしく尋ねた。

「戻ったら叱られます」

「叱られなければ戻りたいの？」

「他に行くところもありますし……」

「サラのことはどうするの？」

「一緒にいたい気持ちはあるのですが、どうしても淫欲が湧いてしまうのです」

「サラはどうなの？」

「あたしはヨハンと一緒にいたいよ」

「結婚したいのかしら」

「そうよ」

「ヨハン、サラはこう言っているけれど、あなたはそれにどう応えるつもり」

「出来るものならそうしたいんですが……」

「そういうことなら、結婚しなさいよ。あとのことはまあどうにでもなるものよ」

「でも淫欲が抑えられなくて」

「何を教えられたか知らないけれど、それも愛のようなものなのよ。だから抑えなくてもいいの。でも乱暴にしたらいけないわよ」

ヨハンは混乱してしまった。

「あの、あたし思っただけど、ヨハンはおしっこをする必要があったんじゃないかしら」

リタが治療師見習いらしく口を挟んだ。

そうするとヨハンはすみませんと言うて席を外した。

「問題はサラのお父さんね」

「難しいわ」

「なんとかなるんじゃないかしら」

ヨハンが戻ってくるとマルカはもうその話はないで、村の噂話などつまらないことを喋りつけた。

リタはもうこの話とは関係ないのだと思って、そこでお茶会を失礼して治療師の家に戻った。

「治療師、ごめんなさい。あたし見習いを辞めさせられるのかしら？」

リタは家に着くと治療師に向かって謝った。

「ああ、いやそんなことはしないよ」

「でも、治療師に無断で薬を作って、人に挙げてしまったのよ。その上使い方説明しないで」
リタの言葉を聞くと治療師はしばらく考え込んだ。

「確かにそのとおりだね。でもまあヨハンも大したことはなかったんだし……」

「でも、もしかしたらヨハンが死んでいたかも知れないわ」

「まあ確かにそうということもないとは言えないね」

「そんなことをする人をいつまでも見習いにはしておけないわよね」

「いや、そうでもないんだよ。それとも、リタ。おまえ見習いを辞めたくなったのかい？」

「いいえ、辞めたくはないわ。でも……」

「そうだね。確かに勝手に薬を作ったりして、おまえは悪い子だね。だが、辞めるほどじゃあないよ。けれども何もなしという訳にもいかないかね。やはり何か罰を与えないといけないね」

「……罰。罰で済むならどんな罰でも受けるわ」
「そんなに張り切って罰を受けるやつがあるかね。まあどの程度の罰にするかは組合に図って決めるとしようかね。しかしだよ、今度街に行く時

は薬事全科の書き写しを持って行くつもりで思っていたんだが、あとどのくらいで書き写しが終わるかね。どうせなら街に行くのは一度で済ませたいんだがね」

「あと三日で終わらせるわ」

「そうかね、じゃあ四日後に街の治療師組合に行くことにしようかね」

それから三日間リタは必死になって書き写しをした。治療師に三日で終わると言った時、書き写し以外の雑用のことをすっかり忘れていたのだ。一日中書き写しだけをしていれば三日で終わると思ったのである。

それでもリタの心は少し晴れていた。治療師の見習いを辞めなくて済むことはリタにとって大きな喜びだった。治療師組合の人と相談して決めるという罰のことが少し心配だったけれど、それさえ済めばまたいままでどおりの見習いの生活が続けられるのだ。

二日目の朝、リタはお母さんからヨハンが鍛冶屋の見習いとしてお父さんのもとで働くことになったと聞いた。結局、結局修道院には戻らないことにしたらしい。うまく見習いが務まるよ

うなら、サラとの結婚も遠くないだろう。

三日目の夜にようやく薬事全科の書き写しを終えて、書き写した紙をまとめて袋に入れた。そして四日目の朝、出かける治療師にお弁当を渡して、見送る言葉を掛けた。

「いつてらっしゃい。気をつけて」

「何言ってるんだね。おまえも一緒に行くんだよ」
治療師の言葉にリタは驚いて、それから慌てて自分の分のお弁当を用意した。街に行く途中で家に寄って、お母さんにこれから街に行くと言ったら、さすがのマルカも少しびっくりしたよつだ。